

健康文化

「ナンジャモンジャの花咲く頃…」

北川 勝弘

お花見の誘い状

今年もまた5月の連休の終わり頃に、岐阜県瑞浪市のある料理旅館から葉書が届いた。「ナンジャモンジャの花咲く頃…」という大きな見出しの下に、カラーで花の写真までプリンタ出力されていて、「今週・来週が一番の見頃と思われます」との、お花見の誘い状である。日頃、職場で雑用に追まわられているこの身には、一年に一度のこのお花見は、大げさに言えば、自分が生きていることの証を確認するための貴重な機会でもあるのだ。そこで、早速、次の週末に瑞浪までナンジャモンジャの花見に繰り出すことにした。毎年いつも相棒をつとめてくれるカミさんは、当日に先約があるとのことだったので、ちょうど4月下旬から3ヶ月間、当センターの客員教授として滞在中のインド人研究者をドライブの相棒として誘った。

ナンジャモンジャとは？

ナンジャモンジャとは、モクセイ科ヒトツバタゴ属の落葉広葉樹、ヒトツバタゴのことである。最近名古屋市内でもあちこちの街路樹として植えられるようになってきているから、知っている人も多いことだろう。名古屋市内では5月の連休前後の頃に、樹の新葉の先に十文字に4裂した小さく細い花（本当は、本物の「花」を保護する花冠と呼ばれる部分）がびっしりと咲く。もともと、この花の学名（*Chionanthus retusus*）（そのうち属名を表わす第1単語）は、「雪のように白い花を持つ」という意味で、英語の通俗名も「Snow Flower/Snow Blossom」（雪の花）とされているだけに、日光を浴びて反射すると樹木全体がこんもりと真っ白な雪をかぶったように見え、それは見事な光景である。



ナンジャモンジャ(岐阜県蛭川村鳥沢) 1999.5 撮影:前田 豊氏

ヒトツバタゴという名称については、江戸時代後期の尾張の本草学者・水谷豊文が、尾州二ノ宮山中（愛知県）でこの木を発見し、名づけたものと伝えられている。ヒトツバタゴは、その近縁のトネリコ属がみな（羽状）複葉であるのに、これは単葉だから「ヒトツバ」とされ、トネリコの方言の「タゴ」と組み合わせて命名されたものようだ。

ヒトツバタゴは、またの名をナンジャモンジャ、ロクドウボク、アンニャモンニャとも呼ばれると、樹木図鑑の類には記載されている。わが国で「ナンジャモンジャ」と呼ばれる植物は、明治神宮外苑資料館によれば、全国に45ヶ所29種類あるそうで、有名なものとしてクスノキ（千葉県）、イヌザクラ（埼玉県）、アブラチャン（茨城県）、リョウメンヒノキ（山梨県）、ホルトノキ、ピランジュ、ハルニレ（神奈川県）、カゴノキ（静岡県）などが挙げられている。柳田国男の「信州随筆」には、神社・仏閣にある御神木・尊い樹木や、その地方で見慣れぬ種類の大木が「ナンジャモンジャ」と呼ばれていると、記されている。要するにナンジャモンジャとは、正体が何かわからない対象に用いられてきた名称のようだ。

幕末の頃、現在の明治神宮外苑に近い東京・青山の“六道の辻”付近の民家にあった、樹齢を重ねたヒトツバタゴが、「六道木（ろくどうぼく）」と呼ばれていたらしい。明治18（1885）年にそのあたりが陸軍練兵場になったとき、時の政府はこれを買って上げてそのまま残したというから、富国強兵の国策にまっしぐらの方針をとっていた明治政府にしては、なかなか見上げたものである。

ヒトツバタゴの自生地は、わが国では愛知・岐阜県境付近と長崎県対馬列島の最北端・上対馬町が知られている他、朝鮮半島、中国大陸東部、台湾、遠くは北アメリカの東部／南部にも分布していて、著しい隔離分布となっていることが、生態学的には興味深い点である。

愛知県北部と岐阜県東濃地方との県境付近の各所に自生する大きなヒトツバタゴを見て回ると、いずれも天然記念物の指定を大正時代末期に受けていることに気づく。明治36（1903）年、当時の（東京）帝国大学教授・白井光太郎博士が政府にヒトツバタゴの保護願いを出し、種々尽力したため、大正13（1924）年12月に天然記念物の指定を受け、保護されることになった経緯があるので、おそらく、白井博士によるヒトツバタゴ保護／天然記念物指定の活動と期を一にした動きのなかで、岐阜県での天然記念物指定が実現したものと思われる。初代の六道木は樹齢百数十年といわれたが、昭和8（1933）年に枯死したため、明治36（1903）年頃に白井博士が根接法で得た二代目六道木と伝えられるヒトツバタゴが、現在、明治神宮外苑で見られるものだという。

ナンジャモンジャとの出会い

私がナンジャモンジャという面白い名前の樹に出会ったのは、忘れもしない今から23年前、1978年の5月中旬のことだった。その時のヒトツバタゴとの偶然の出会いを、私は次のように記録している（「林研」16(5), 1980年5月）。

「ひと目惚れ」という言葉がある。これは何も男女の仲についてだけ言われるものではないようだ。一昨年（1977）年の5月中旬、ひとつの樹に出会って以来、私はその樹に強く魅せられてしまった。それはまさに、“ひと目惚れ”とでもいう他はない感じなのである。



ナンジャモンジャ(岐阜県恵那市笠置山) 1995.6 撮影:前田 豊氏

その日は快晴で、温かく、風もないおだやかな日和だった。私は所用のため、一人で中央自動車道の瑞浪ICから恵那ICに向って車を走らせていた。虎溪山パーキング・エリアを過ぎてすぐ、瑞浪市の白狐温泉の近く…(中略)…にさしかかったとき、私は何気なく車窓の左手に目をやった。すると、どうだろう、ぽっかり青空がひろがったなかに、大きな雪のかたまりが朝日を浴びてキラキラ輝いているではないか。純白の、新雪の冠であった。それは一瞬のうちに視野から去り、私の脳裏には、神々しいばかりの雪の反射光が焼きついた。」

それから大分時間が経ってから、私はそれが樹の花であったことに思い至る。「雪の冠をかぶったあの樹は、一体、何だったのだろうか。雪の華とでもいうべきあの見事な花は…。それから暫くの間は、折りに触れてその日の、その瞬間の様子がよみがえり、はっと胸がときめくのを意識した。」その後、いくつか文献をひっくり返してみても、私はその樹が「ナンジャモンジャ」と呼ばれる珍しいものであることを知った。自分が全く何の予備知識も先入観も持たずに、

初めて突然ナンジャモンジャと出会ったときに受けた、「雪のかたまり」だと感じた第一印象が、この樹の学名や英名（雪の花）のイメージとまさに一致していたことが、私のこの樹に対する興味と関心をますます高めたのだった。

ナンジャモンジャ交遊記

岐阜県瑞浪市釜戸の白狐温泉付近に自生しているヒトツバタゴが白い花を開かせる頃になると、毎年、常連客が花を愛でにやってくる。自家用車族もいれば、釜戸駅からタクシーでやってくる人もいる。私もその一人で、自称“ナンジャモンジャ気狂い”。私の場合、毎年、ただ単にナンジャモンジャの開花状況を見て、それで満足して帰るのである。私が初めてナンジャモンジャに出会ってからの20数年間を振り返ってみると、実にいろいろな交遊があったことに、思い当たる。

私のナンジャモンジャ探訪史を振り返るとき、忘れてならないのが、ナンジャモンジャ愛好の“同士”たちである。我が家の花好きなカミさんに、名古屋大学生協書籍部に勤める動植物愛好家のM女史、そして夫婦仲睦まじい八事の写真屋さん夫妻。年に一度は日程を調整しながら、一緒にナンジャモンジャの花見を楽しんできた。

今から10年ほど前、八事付近の写真屋さん、撮影してきたばかりのナンジャモンジャの写真の現像を依頼した折りに、「この樹は何ですか？」と、その店の奥さんから尋ねられたことがあった。それがきっかけで、その当時までは専らハッチョウトンボの生態写真撮影を趣味にしておられたご主人とその奥さんが、俄然、ナンジャモンジャ探訪に熱中し出したのである。写真撮影の技術にかけては、そのご主人はまさにプロであり、ナンジャモンジャの“傑作写真撮影”という点ではとても彼の足元に及ばないことを、すぐに私は自覚させられた。今では、彼の撮影してくるナンジャモンジャの写真に、私の方が心をなごまされている。

私は2年前に今の職場へ移ってから仕事がきわめて忙しくなり、また仲間のそれぞれも老親介護やその他の事情があったりして、私たちの年齢が高くなるにつれて、以前のようにはなかなかうまく花見ドライブの日程調整もつけにくくなってきたが、気心知れた遊び仲間は、これからますます私にとって貴重な存在になっていくことだろう。

ナンジャモンジャの雌雄性

1984年5月下旬、名古屋大学農学部でN教授や同附属研究施設のI教授等、普段は私があまり交流を持つ機会がなかった研究分野の、しかも私より一回り以上も年配の先生方から、白狐温泉での「ナンジャモンジャの花を見る会」なる場に、突然、同席しないかとお招きを受けたことがあった。私が“ナンジャモンジャ気狂い”を自称していて、毎年、林学科の学生を引き連れてはナンジャモンジャの花見に繰り出していることを、人伝てに聞きつけられたからだという。私以外の先生方は、それぞれご夫婦同伴で、I料理旅館の会席昼食を兼ねてのレクリエーションであった。



ナンジャモンジャ(愛知県藤岡町昭和の森) 1998.5 撮影:前田 豊氏

その花見の会で初めてお会いした椋山女学園大学の太田敬久教授とは、その翌年、1985年の5月に、名古屋市内や岐阜県瑞浪市、恵那市、蛭川村などのヒトツバタゴ自生地を、それぞれの開花時期に合わせて一緒に訪ねまわった。太田先生は当時、ヒトツバタゴが図鑑などでは「雌雄異株」とされているけれども、それが本当かどうかについて疑問をもたれ、1979年以来、毎年ヒトツバタゴの開花時期を選んで、各樹木個体の花の雌雄性について調査・研究中であった。太田先生の永年にわたる観察結果によれば、ヒトツバタゴには真の「雌株」

がなく、みな明確な両性花または雄株だった、という。真の雌株が未だ見つからないから「雌株は無い」とは言い切れないのが、この種の研究方法の辛いところだ。真の雌株がなく、両性花株と雄株とが存在する雌雄性の型は、雄性二家花、雄性異株、あるいは雄花異株などと呼ばれ、広い意味での雌雄異株の1型だが、ヒトツバタゴもひとまずこの型としておいてよいであろう、というのが太田先生の結論である（太田敬久：ヒトツバタゴの雌雄性。椋山女学園大学研究論集14号：179-191, 1983）。

太田先生が撮影された、ヒトツバタゴの花とその蜜を吸いにきた虫・ハナムグラのきれいな写真が、岩波書店から発刊されている雑誌「科学」（1985年5月号）の表紙を飾っている。私は、太田先生の朴訥なお人柄もさることながら、ひたすら一途に真理を明らかにしたい、という願いに基づいて邁進される、その生き様に感銘を覚えたものであった。ちなみに、1991年発行の「樹木大図鑑」（北隆館）やその他の図鑑類でも、ヒトツバタゴの説明の項については、おおむね「雌雄異株」だと記載されている（記載が全く省略されているものもある）。いつの日にか、各樹木図鑑におけるこの項目の記載が太田先生の指摘に基づいて、より正確に書き換えられることを、私は心密かに念じている。

白狐温泉のナンジャモンジャ

冒頭に紹介したインド人客員教授とのドライブは、快晴に恵まれ絶好のナンジャモンジャ探訪日和で、快適な小旅行となった。私が23年前に“ひと目惚れ”した中央自動車道わきのナンジャモンジャは、今年は花の勢いもよく、その白さを誇っていた。たくさんの自動車と、大型カメラを構える素人カメラマンとで、樹の周りはひととき賑わった。私たちはその後、葉書送信のお礼を告げに、白狐温泉のI料理旅館に立ち寄った。この旅館では、葉書を出すようにする以前は、毎年5月連休頃になるとナンジャモンジャの開花時期を問い合わせる電話が殺到して、その応接にいとまがなかったそうである。

旅館の建物は斜面上に建てられているため、ナンジャモンジャの樹の、上の方の枝に咲いた花を、2階の窓からすぐ間近かに眺めることができる。また、階下の風呂場の窓からも花を愛でることができるのも、この旅館の“売り物”である。この旅館の敷地内には5～6本の大きなヒトツバタゴがあって、そのうちの数本は岐阜県の天然記念物に指定されている。この地方のヒトツバタゴの特徴として、いずれも濃飛流紋岩地帯の比較的湿地的な場所に自生している

ことと、その樹木の近くに蔓性のカザグルマ（クレマチスの一種）が生育していることが挙げられる。この旅館の敷地内にあるヒトツバタゴのすぐ傍には、青紫色のカザグルマが大きな花を開かせていて、ヒトツバタゴの白い花とよい対照になっていた。

女主人から「中に入ってお茶でも飲んでいってくださいな」と勧められたのを言葉通り素直に受けとることとし、インド人の相棒と2人、遠慮なく建物の中へ上がりこみ、窓からヒトツバタゴの花を鑑賞させてもらった。女主人の2人のお孫さん（4歳と3歳の女儿）が、インド人の相棒に「英語をしゃべるおじちゃん」と人なつこく（日本語で）しゃべりかけて、彼を喜ばせていた。この旅館の応接は、彼にとって文字通り心なごむひとときとなったことだろう。正午を迎えた旅館は、昼食を摂りにくる大勢の団体客の受け入れでおおわらわになるであろうことを見越して、「また、来年もどうぞお出かけください。」との女主人の声を背に、私たちは早めに辞去した。



ナンジャモンジャ(名古屋大学農学部) 1996.5.11 撮影:前田 豊氏

旅の終わり

この日、私は恵那市の外れにある、ヒカリゴケで有名な笠置山の中腹にあるヒトツバタゴ自生地にも、開花時期を予測するために立ち寄るつもりだった。そこは海拔が約1,100mのところにあつて、標高がかなり高いため、ヒトツバタゴの開花時期は毎年6月上旬である。樹冠の大きさが直径10m近くもあるため、花の満開時期には、蛭川村の鳥沢や市ノ瀬地区のヒトツバタゴとならんで、大変優美な「雪の華」を見せてくれるのである。

しかし、昨年までとは自動車の上り口の様子が異なるように感じられ、日頃、ルートファインディング（道探し）にはいささかの自信を持ってきた私としては不甲斐なくも、道に迷ってしまった。公道から分かれて林道に入る分岐点位置の目印にしていた建物が、少なくとも数年前までは確実に建っていたはずなのに見あたらず、その代わりにこれまで見たこともなかったミレット・ゴルフ場なるものに迷い込み、すごすごと引き返す破目になった。山の中とはいえ、開発の波はここまでも押し寄せてきているのだと、改めて実感させられた。

私の私的趣味であるナンジャモンジャ探訪に付き合わせてしまったインド人研究者は、ケララ州森林科学研究所の木材科学部長を務めているが、ヒトツバタゴの花はもとより、岐阜県恵那地方の天然林や人工林など、各種の森林風景に触れて大変興味をかきたてられたようで、往き帰りの道すがら、しきりにカメラのシャッターを押していた。しかし、島崎藤村ゆかりの馬籠（長野県木曾郡山口村）にまで足をのぼしたため、夕方5時を過ぎてしまった帰りの道中では、しきりにあくびを連発していた。おそらく、このドライブは彼にとって少し長旅にすぎたかもしれないと、旅程を欲張りすぎたことを少し反省した。

(2001/05/12 記)

(名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授)